

特集 新型コロナウイルスへの対応

新型コロナウイルス雑感

亀田総合病院 消化器外科 地域医療連携室
草薙 洋

はるか昔のように思えるが、まだ1年も経っていない。2月15日に千葉内視鏡外科研究会を主催させていただいた時、すでにこの病気がジワジワ蔓延しつつあった。代表世話人と相談。「大丈夫でしょ。」とのことで通常開催し、懇親会で乾杯もした。私が関与する学会、研究会はこれが最後で休眠に入った。ようやくwebで始まったが、訳のわからぬID、パスワードが来るは、power pointは音声入りとか私にとっては大変苦痛であり、それが続いている。

あの頃、当院は隣接市のホテルをバックアップし、武漢からの帰国者を受け入れ、世間の耳目を集めていた。外科は直接のかかわりは少なく、正直言って「どこ風吹く？」という感じだった。ところが秋になって県の警戒レベルがあがり、新型コロナ専用病床が外科病棟のフロアに隣接されたあたりから、個室病床は減るは、手術患者の居住地によっては術前PCRとなるとこちらにも風が吹いてきた。冬を迎えるにあたりどうなるのか私には想像できない。

鴨川には何軒も行きつけの店がある。大抵は一人でいくのでコロナ禍の今もその習慣は変わっていない。御常連に聞かれる。「先生コロナどうなんの？鴨川でも増えてんだっぺ。」家に帰れば妻から「病院の職員からでたみただけど大丈夫なの？」隣の畑の親爺は大根をくれながら「明日俺亀田病院行くけど人が多いし大丈夫？」メディアは連日、感染者数では物足らず最近では重症者数、さらには病床の逼迫率まで報道し、専門家とコメンテーターが近未来のカタストロフィを語り合う。

確実にいえるのは、一介の臨床外科医には、今後どうなるのか全くわからないということ。それともう一つ、根拠は全くない、むしろ願望あるいは苦境時の脳内エンドルフィンがそうさせているのかもしれないが、「そんなに騒がなくてもいいじゃない？」という感覚の存在。

こう思っているのは私だけでないはずだ。